九共大紀要
第5巻　第2号
2015年3月

[各種報告]

# バスケットボールにおけるジュニア期のクラブチーム化について JBAオールスター ～もうひとつの大会～ の参加報告を兼ねて

大山　泰史*，大下　和茂*，川面　剛*，八板　昭仁*

# About club teaming of the youth period in the basketball

Yasufumi OHYAMA*，Kazushige OSHITA*，Tsuyoshi KAWAZURA*，
Akihito YAITA*

## Ⅰ．はじめに

近頃メディアでは，運動部活動に関する体罰や指導者不足などの問題がよく報じられている．そんな中で，2014年1月18日～ 19日に福岡県北九州市で開催された第7回JBAオールスター～もうひとつの大会～へ本学女子バスケットボール部が参加した．本学女子バスケットボール部は，ゲームや大会補助等を行った．本稿では，第7回JBAオールスターへの参加報告を兼ねて，日本における運動部活動の現状に関することやJBA（Japan Basketball Academy）の紹介を行う．

## Ⅱ．部活動の背景

日本の運動部活動加入率は，文部科学省（1997）やベネッセ教育総合研究所（2013）の調べによると1990年代後半から現在に至るまで中学校で約7割，高等学校で約5割と大きな推移は見られない．

日本におけるスポーツ活動の多くは，これまで学校制度を基盤として行われてきた．そのなかでも運動部活動によるスポーツ活動がその中心を担ってきたと言われている（清水，2011）．その為，運動部活動に対して好感度や期待を示す意見が多い．例えば，小林（2012）や関（2009）は，部活動が人生に大きな影響を与えていることや子どもたちの社会性や協調性，コミュニケーション能力等を涵養する因子になるため，重要性であると報告している．文部科学省（2013）は，表1のような意義や効果を示している．

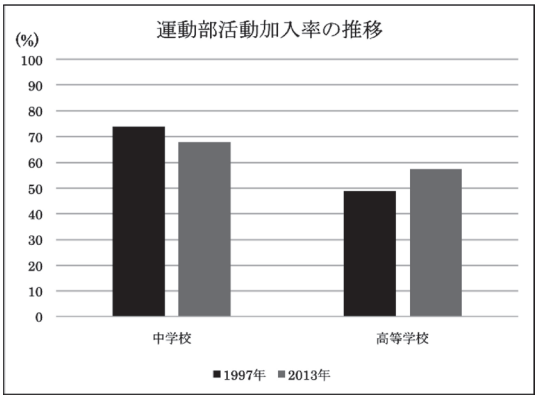



図１　運動部活動加入率の推移
（文部科学省，1997；ベネッセ教育総合研究所，2013）より作図

表１　運動部活動の意義や効果 文部科学省(2013)作表

| |
|---|
| ○スポーツの楽しさや喜びを味わい，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる． |
| ○体力の向上や健康の増進につながる． |
| ○保健体育科等の教育課程内の指導で身に付けたものを発展，充実させたりするとともに，運動部活動の成果を学校の教育活動全体で生かす機会となる． |
| ○自主性，協調性，責任感，連帯感，などを育成する． |
| ○自己の力の確認，努力による達成感，充実感をもたらす． |

一方，部活動は，教育課程における位置づけが曖昧である．実際に運動部活動の場においては，毎年指導者による体罰の事案が報告されている．平成24年12

＊九州共立大学スポーツ学部　＊Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Sports Science

月には，顧問の教員の体罰を背景として高校生が自らの命を絶つ事案も発生した（文部科学省, 2013）．また，少子化や生徒数の減少，学校教員の多忙化や高齢化，学校に対するクレームの増加，指導者と生徒の意識の乖離などによって部活動の維持が困難になっているとの指摘もある（三本木・高橋，2008）．このように，運動部活動には，問題点も多く報告されており体罰問題や指導者の負担等を改善する必要性がある．これらの問題を解決するため三本木と高橋（2008）は，①地域と連携しながら勝利至上主義のみに捉われない，多様な目的を持った生徒の受け皿となるような体制をとること，②部活動の運営にあたっては，法令順守，意思決定の透明性確保に特に注意し，それらの情報については関係者に対して積極的に開示すること，③部活動の運営は，顧問に任せきりにするのではなく，地域住民などによる外部講師などを活用するなど，学校を中核としたグループを形成して学校全体で進める体制を構築することの3点の必要性を報告している．

実際に先述した解決策を元にして，運動部の指導の外部委託を東京都杉並区は，2013年度から導入している．大阪市立中学校も運動部の指導にあたる教員の負担を軽減するため，2015年度から民間事業者に外部委託する方針を決めるなど具体的な方針を示す自治体も出ている．

## Ⅲ．一貫指導の重要性と現状

中塚（1999）は，授業以外のスポーツ活動の展開の重要性を述べている．また，関岡（2004）や鈴木・蔵元（2013），松村ほか（2008），栗林ほか（1999），蔵元・鈴木（2013），土井ほか（2008），久木留（2009）は，競技力向上に関してジュニア期の一貫した指導が重要であるとの指摘している．

土井ほか（2008）は，各競技団体が行っている一貫指導システムの実践例の一つとして，サッカーが好例として挙げている．サッカー界では，このシステムを取り入れ，ゴールデンエイジと呼ばれる7歳から14歳の頃に専門的なシステムの導入などの効果が近年の競技力向上に繋がっていると言われている（松村ほか，2008）．

## Ⅳ．バスケットボール界の現状

日本の2014年のInternational Basketball Federation（FIBA）ランキングは，Combined（Men，Women，Boys, Girlsの4つのカテゴリーの合計ポイントの順位）で19位，Menで46位，Womenで15位，Boysで28位，Girlsで10位（FIBA HP）となっている．日本のバスケットボール人口は，世界で有数の競技人口を誇るとされているが競技力は低いと評価されている（松村ほか，2008）．

スポーツの競技力向上は，ジュニア期の指導の充実が大きく影響する一因（栗林ほか，1999）と言われており，バスケットボールにおいてもジュニア期の指導充実の重要性は認識されていながら，先述（3章）のような全国レベルの一貫指導の成果の報告はみられていない．日本バスケットボール協会における一貫指導システムは，2002年からエンデバー制度（一貫指導システム）を導入した．エンデバー制度では，トップエンデバー，ブロックエンデバー，ジュニアエリートアカデミーといった事業が行われている．トップエンデバー制度とは，U-18，U-15，U-14の代表のことで，選出された選手に対して強化と育成を行う事業である．ブロックエンデバー制度は，全国の9つの地区（北海道，東北，関東，北信越，東海，近畿，中国，四国，九州）からトップエンデバー候補として選抜された選手に対して強化や育成を行う事業である．ジュニアエリートアカデミーとは，ジュニア世代の長身者や長身者候補に対して世界に通用する選手の育成を目的として，選出された選手に対して行う事業である（JBA HP）．

日本におけるバスケットボールは，このように一貫指導システムがあるものの，その活動が本格化するのは，小学校3年生または4年生以降であり小学校低学年または小学校入学以前の子どもたちに対しては何の施策も行われていないと言われている（鈴木・蔵元，2013）．

バスケットボールで高い競技力を有する諸外国のチームの一つにFIBAランキング1位のアメリカが挙げられる．アメリカでは，日本に比べてバスケットボールを始める年齢や地域のクラブチームに所属する年齢も早いと言われており，バスケットボール競技の環境が整っていることが報告されている（村松ほか，2008）．

## Ⅴ．Japan Basketball Academy（JBA）について

JBA（Japan Basketball Academy）は，2006年に立ち上げられ国内・国外で幅広くバスケットボールの普及やコーチや選手の育成，アメリカでの合宿等を行う団体である．

表２　JBAの活動内容

| | |
|---|---|
| 国内 | コーチ・審判・トレーナーの育成と派遣<br>バスケットボール情報の収集・編集・配信事業<br>JBA オールスターの開催<br>クリニック・講習会の開催<br>スポーツマネジメントの勉強とスタッフの育成<br>バスケットボールスクールの運営<br>イベント（リーグ・トーナメント・定期戦）開催 |
| 国外 | コーチ研修会<br>海外の教育現場の視察<br>サマーキャンプ（ジュニア～プロまで）<br>ウィンタースクール<br>NCAA や NBA などのゲーム観戦 |

## １．JBAの理念と方針

JBAの理念は，世界基準という価値観を持っており，小さな世界で競争する環境に子どもを置くのではなく，世界を視野に入れた環境を日本に作り，その中で未来を担う子ども達を育てることを目的としている（JBA HP）．JBAでは，アメリカとの定期的で継続的な交流を行うことによって，日本のバスケットボール界の競技力向上へ繋がることや海外への選手や指導者を輩出していく環境を作っている．アメリカとの定期的な交流としては，ECBA（Emerald City Basketball Academy）というシアトルを中心とするアメリカ全土に7つのスクールを持つバスケットボールスクールやUnited States Basketball Association（USBA），National Basketball Retired Players Association（NBRPA）などのアメリカの様々なバスケットボールスクールとの交流を行っている．その中でもこれまでにNBA選手などの指導歴も持ち合わせているECBAのメインコーチであるジェイソン・バスケット氏は，アメリカの多くの子ども達の指導に携わっており，ECBAで選手が上達する為の様々なスキルトレーニングの方法や道具を編みだしている．このジェイソン氏と交流があり JBAの発起人でもある西田辰巳氏がECBAのトレーニングやバスケットボール理論等をJBAに紹介し普及活動を行っている．

JBAの方針としては，表3のようなジュニア期における基本育成方針を明示し，これを元に子ども達の心・技・体の指導を行っている．

表３　JBAジュニア基本育成方針

| |
|---|
| メンタル（Mental）心（脳）身体を司る精神面の育成（心）<br>モチベーション・協調性・コミュニケーション・集中力・リラクゼーション・規律を守る力・判断力・決定力・責任感・尊敬心 |
| テクニック（Technique）ポジションに関係なく全てのポジションをこなせる技術の育成（技）<br>ドリブル・シュート・パス・フェイント・ピボット・ステップワーク・ボールハンドリング・コミュニケーション・２人～５人のコンビネーション |
| フィジカル（Physical）総合的な運同調性能力の育成（体）<br>柔軟性・スピード・持久力・パワー・筋力 |
| メディカル（Medical）ケガをしない準備とメンテナンスの知識を身につける（心・技・体）<br>コンディショニング・リハビリテーション・栄養 |
| タクティクス（Tactics）1 歩･2 歩と「先」を読む力，戦術の向上（心・技・体）<br>基本的なチームオフェンス・ディフェンスを知り，「先」を読む技術を身につけるゲーム中起こりそうな状況を判断する |
| ゲームへの応用（Achievement）ゲームの組み立て力を養い，身につける指導（心・技・体）<br>実践を通して，総合的な技術の向上を図ったり，日頃の練習によるスキルアップの確認を行う |

## ２．バスケットボールスクールとその特色

JBAの活動の一つであるバスケットボールスクールは，2006年に熊本県・広島県・愛媛県・岐阜県の4県から始まり，現在では東京都・神奈川県・愛知県・大阪府・福岡県などのスクールと協力して活動している．スクール運営については，ECBAを参考として世界基準を意識しながらバスケットボールに必要な基礎を，楽しく厳しく指導し，選手個々のオリジナリティの確立を目指している．

JBAでは，年齢や技術レベルによって図2のようにクラス分けがされ，クラス毎に具体的な練習内容が定められている．ビギナークラスのB1クラスは，バスケットボールを始める為の導入のクラスである．B1クラスでは，子ども達にバスケットボールが好きという気持ちを持たせたり，バスケットボールという競技が楽しいと思えるよう一つ一つの練習でタイムを計測したり，シュートやパスの成功確率などを競わせる等の工夫を凝らして興味を持たせるよう指導する．B2クラスでは，バスケットボールの基礎となるパスやドリブル，シュート等の技術を反復して練習を行うことで基礎技術が習得できるようにする．また，コーチの笛や合図に反応させるようにし，集中力を高めたり持続させたり，連帯感や一体感の状況下で練習を実施する．B3クラスでは，B1クラスやB2クラスで習得した技術が実践できるように練習を実施する．例えば，ハーフコートの1対1や2対2のオフェンス，オールコー

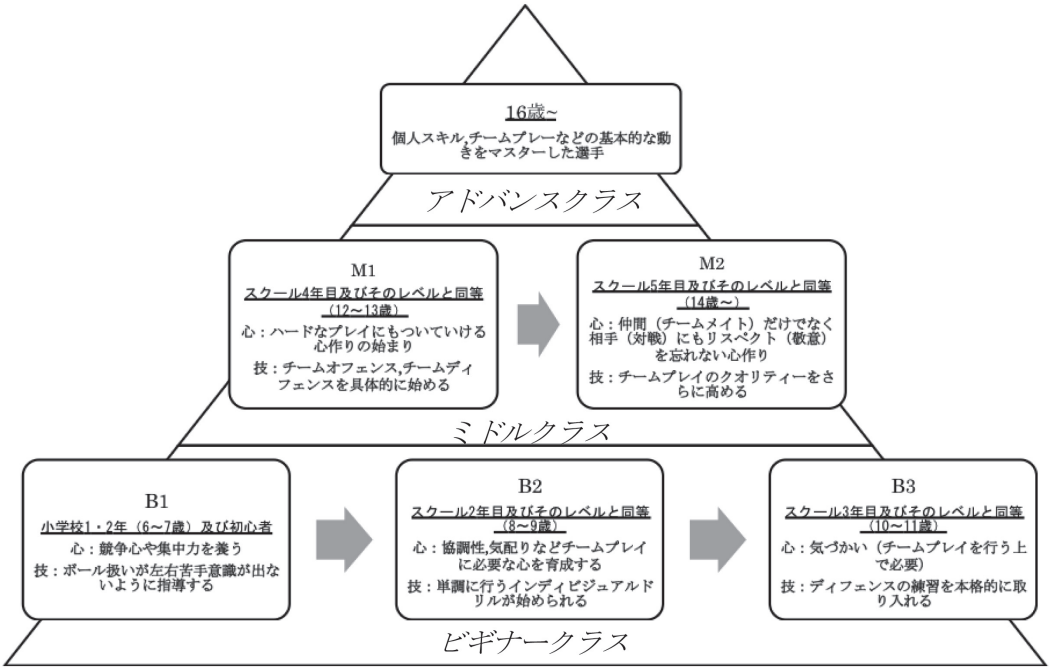



図２　ジュニア期のバスケットボール指導におけるカテゴリー分類（JBAバスケットボールスクールを参考）

トを使ったオフェンスとディフェンスの対峙が行われるチーム練習を行う．ミドルクラスでは，ビギナークラスで習得した個人スキルや精神的な部分を元に心の強さとスキルのバランスを学ぶことやチームプレイを円滑に行うために必要な個人技術が習得できるように練習する．目指すべきゴールを明確にする為にビギナークラスでは，スキルテストを用いて個人の技術のレベルを数値化している．ミドルクラスやアドバンスクラスでは，選手の空間（スペース）の理解や戦術の理解，遂行能力を客観的にコーチが評価を行うようにしている．このように，目的や方法をしっかりと確立することやクラス分けも子どもの発育発達と技能や戦術の理解等によって細かく分けることで，一貫した指導がスクールの中で行えている．

また，JBAでは，スクール運営にあたって育成会を発足している．この育成会とは，「子どもが真ん中」という考えのもとチームやイベントなどの様々な運営事を保護者とコーチが一緒になって考え話し合い，ルール設定していくことを目的にしている．活動としては，定期的に子どもの指導について勉強会を行うことやスクールやチームのルールが適正かどうかを話し合いチームの活性化のためのイベントを企画したり運営を行っている．

## Ⅵ．JBA オールスター ～もうひとつの大会～に参加して

### １．大会の概要

JBAオールスターは，JBAで行われている国内事業の一つで各地区のJBAのスクールが集まり大会等を行うイベントである．2008年に第1回JBAオールスターが開催され，7度目の大会がJBAオールスター～もうひとつの大会～として，2014年1月18・19日（土・日）に北九州市TOTO第二工場体育館で開催された．

本大会の目的は，ゲーム中の“個”を評価するための大会とし，日頃の各地区でのバスケットボールスクールにおいて培った技術を競い合いながらお互いの親睦を高めることである．

本大会への参加は，各地区のJBAのスクールであるTornadoes Academy 北九州 Orange Raise から32名，Tornadoes Academy 愛媛 gaNeza から13名，Tornadoes Academy 熊本 REDBEARS から10名，Tornadoes Academy 熊本合志 Perfect Combustion から7名の合計62名の幼稚園生から高校生の選手と全国から19名のコーチ，九州共立大学女子バスケットボール部，各地区保護者・関係者が参加した．

大会目的を達成する為，事前に各地区のJBAのコーチ達によって，コーチミーティングが行われた．そこで計画された図3のタイムスケジュールに沿って本大会が実施された．また，目的を達成させる為に独特の

タイムスケジュール

1月18日(土曜日)

| 時間 | Aコート | Bコート |
|---|---|---|
| 10:30 | 熊本　合流 | |
| | アップ&ゲーム | |
| 12:00 | 愛媛合流　昼食 | |
| | スタッフ打ち合わせ | |
| 13:00 | 開会式 | |
| 13:15 | 全員アップ　担当ryuさん | |
| 13:30 | U-10リーグ戦　1試合目～4試合目 | U-12　たくまコーチクリニック(30分) |
| | | U-12　フリースロー大会<br>ヒストリカルゲーム |
| 15:15 | U-12リーグ戦　1試合目～6試合目 | U-15+大学生　たくまコーチクリニック(30分) |
| | | U-15　フリースロー大会<br>ヒストリカルゲーム |
| 16:45 | U-15リーグ戦　1試合目～4試合目 | U-10　たくまコーチクリニック(30分) |
| | | U-10　フリースロー大会<br>ヒストリカルゲーム |
| 17:30 | 終了 | |
| 18:00 | 夕食/懇親会 | |
| 20:00 | ホテル　お風呂　(カレー) | |
| 21:30 | 就寝 | |

1月19日(日曜日)

| 時間 | Aコート | Bコート |
|---|---|---|
| 8:00 | 集合/スタッフ打ち合わせ | |
| 8:10 | 全員アップ | |
| 8:30 | U-10リーグ戦　5試合目～6試合目 | U-12　たつみコーチクリニック(30分) |
| 9:00 | U-12リーグ戦　7試合目～10試合目 | U-15+大学生　たつみコーチクリニック(30分) |
| | | ヒストリカルゲーム |
| 10:00 | U-15リーグ戦　5試合目～6試合目 | U-10　たつみコーチクリニック(30分) |
| | | ヒストリカルゲーム |
| 10:35 | コーチエキシビジョン　5分×3試合 | |
| 10:50 | コーチMTG | |
| 11:05 | 閉会式 | |
| 11:30 | 昼食 | |
| 12:00 | 愛媛出発 | |
| 13:00 | 北九州　熊本組　親睦ゲーム | |
| 16:00 | 解散 | |
| | | |
| | | |

図３　第7回JBAオールスター～もうひとつの大会～プログラム

図４　第7回JBAオールスター～もうひとつの大会～の様子（A：U-10リーグ戦　B：U-15選抜 VS 九州共立大学　C：ヒストリカルゲーム　D：スキルトレーニング）

特徴的なルールが定められている．例えば，コーチが罵声を発した場合コーチは2分間退場しなければならないというルールが設けられている．これは，子ども達がコーチや保護者等に委縮せずのびのびとプレイをする為である．試合時間は，U-15で7分-2分休憩-7分，U-12とU-10で5分-2分休憩-5分であった．リングの高さは，U-10，U-12，U-15全てにおいて3.05mとし，ボールは，男子で7号球，女子と混合チーム，U-10で6号球を使用した．また，交代に関しては自由に行えるようにし，タイムアウトの請求はできない．

大会が開催されたTOTO第2工場体育は，バスケットボールコートが2面取れる広さでありながらリング

とコートが1セットしかない体育館であったがJBAのコーチ陣が工夫を凝らすことで時間もスペースも無駄なくプログラムが行われた．プログラムは，Aコート（リングのあるコート）では，常にゲームが行われ（図4-A・B），Bコート（リングのないコート）では，スキル向上の為のクリニック（図4-D）やヒストリカルゲーム（図4-C）が行われた．

### 2．1）クリニック

大会中に開催されたJBAのコーチによるクリニックでは，参加したJBAの各スクールの選手達を対象に試合の空き時間を利用してスキルトレーニングの指導が行われた．スキルトレーニングは，図4-Dのようなポリ塩化ビニル製のパイプを組み合わせて作られたクロス・オーバー・キラー（C.O.K.）と呼ばれる道具やパイプ椅子などが用いられた．道具を用いてドリブルのトレーニングを行うことで，正しい姿勢や適切なドリブルの強さ等を得られるだけでなく，ドリブルを失敗すればパイプが外れてバラバラになったり，椅子にボールがぶつかったり，失敗と成功の判断が自分で行えるようになっている．内容に関しては，クリニックを担当するJBAのコーチがゲーム中の1対1で使えるようなスキルを取り出し，そのスキルが獲得できるようなメニューとなっていた．

また，大学生とコーチの為にJBAの発起人である西田辰巳氏がハーフコートにおけるオフェンスの空間利用（スペーシング）に関する指導が実施された．西田氏によるクリニックでは，コート上の適切なスポットの説明とそのスポットを有効に活用する為に必要な個人スキルの指導を中心に，1対0から2対2までをコート上のスペースと時間を設定して指導をして頂いた．参加したコーチ陣をはじめ大学生もその理論が腑に落ち，回数をこなしていく度に上達するのを実感していた．

### 2．2）ヒストリカルゲーム

ヒストリカルゲームは，本大会でリングがない状況でも試合が行えるようにと考案されたゲームである．本大会は，日頃JBAで練習し，磨きをかけた個人技術をゲームで披露する機会でもある為限られた日程の中でより多くのゲームをこなすには，二面利用してゲームを進めることが望ましかった．そこで，日頃練習したドリブルスキル等のリングが無くてもゲームで活用できるスキルをゲーム形式で披露し，向上させるヒストリカルゲームは非常に重要な役割を果たした．

このヒストリカルゲームの「ヒストリカル」とは，「歴史的な= historical」という意味を持ち，バスケットボールの発案者ネイスミスが，リングのない状況で桃の籠をリングとして代用した歴史を踏まえたうえでスクールコーチが考案したのではないかと思われる．

### 2．3）ゲーム

リーグ戦では，カテゴリー毎の試合やU-15選抜VS九州共立大学（図4-B），スクール選抜VSコーチ陣の試合が行われた．子ども達は，試合に出場している時には真剣な表情で日頃練習してきたプレイを存分に発揮し，ゲームの数をこなす毎に子ども達のプレイが上達していった．また，コーチ陣も試合中は，常に「good」，「nice play」などポジティブな声かけをして子ども達が委縮せずのびのびとプレイできる環境づくりが行われていた．

### 2．4）参加者の様子

試合がない時も子ども達は，横のコートが空いていれば，ヒストリカルゲームや自然とクリニックで教わったことを練習したり，カテゴリーが上の選手に教えてもったり，他の選手が試合に出ているのをコートサイドで観戦しながら多くの声援を送っていた．特に，選抜チーム対大学生やコーチの試合の時には全員がコートを囲み一つ一つのプレイに歓声があがった．そのような光景を見ている参加選手の保護者達も寒い体育館の中で温かく子ども達の姿を見守っていた．

## 3．大会結果

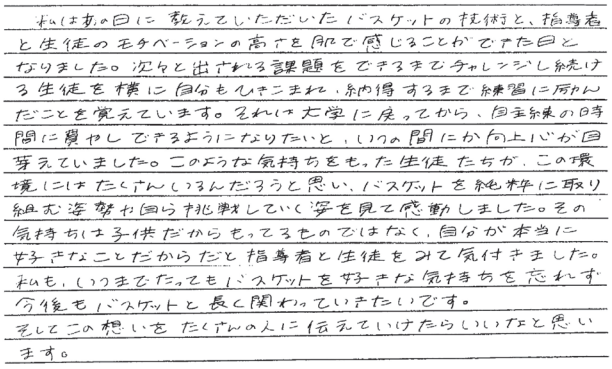
大会の閉会式において，大会中の成果から個人賞が選手達に贈られた．この個人賞は，U-15から3名の選手がそれぞれナイスプレパレーション賞，ナイスプロテクション賞，ナイスチェンジ賞を受賞し，U-12からも3名の選手がそれぞれナイスハンドル賞，ナイススマイル賞，ナイスルックアップ賞を受賞し，U-10からも3名の選手がそれぞれナイスルーズボール賞，ナイス逆の手賞，ナイスボイス賞を受賞した．また，各カテゴリーから数名にカテゴリー賞が与えられU-15から3名，U-12とU-10からは5名ずつの受賞があった．最後に，大会を通しての優秀選手と最優秀選手賞と素晴らしい団体（グループ）がそれぞれ表彰された．

## Ⅶ. 大会運営に携わって感じたこと

本大会では，ゲーム中やゲーム以外の様々な場面において，大会を通して表彰された選手だけでなく多くの選手が心身共に成長しているのを感じられる大会であった．本学バスケットボール部から参加した学生も2日間通して子ども達と一緒にバスケットボールに関わることでバスケットボールの本来の楽しさに改めて気付かされたようである．また，多くの指導者の方々から，参加し協力したことに対して労いの言葉をかけて頂けた．このことは，学生達はもちろん私自身もその言葉を糧に今後もバスケットボールを頑張りたいと思える瞬間であった．

最後に撮影された全体集合写真（図5）の子ども達の笑顔や大学生のレポート（図6）からも参加して良かったということが感じられ，この二日間の大会が充実し有意義であったことが感じられる．

図５　JBAオールスター集合写真



私は夏の日に教えていただいたバスケットの技術と、指導者と生徒のモチベーションの高さを肌で感じることができた日となりました。次々と出される課題をできるまでチャレンジし続ける生徒を横に自分もひきこまれ、納得するまで練習に励んだことを覚えています。それは大学に戻ってから、自主練の時間に費やしできるようになりたいと、いつの間にか向上心が芽生えていました。このような気持ちをもった生徒たちが、この環境にはたくさんいるんだろうと思い、バスケットを純粋に取り組む姿勢や自ら挑戦していく姿を見て感動しました。その気持ちは子供だからもってるものではなく、自分が本当に好きなことだからだと指導者と生徒をみて気付きました。私も、いつまでたってもバスケットを好きな気持ちを忘れず今後もバスケットと長く関わっていきたいです。
そしてこの想いをたくさんの人に伝えていけたらいいなと思います。

図6　参加大学生の感想文

## Ⅷ. JBAの今後の可能性

私は，今後JBAが現在行っている様々な運動部活動での問題や日本のバスケットボール界における問題解決の一助になるのではないかと考える．それは，これまで運動部活動のみであったジュニア期（小学校3年生～高校生）におけるバスケットボール環境をバスケットボールスクールと併存することでより幅広い年齢の子ども達やその保護者のニーズに応えることができるのではないかと考えられる．

JBAは，世界基準を活動理念として掲げており，現在行っているECBAとの交流や国内外での活動を継続してくことで，日本のバスケットボール界の競技力向上の一端を担っていくと考えられる．JBAが今後も一貫指導を継続していくことで世界と戦える選手やコーチを排出していくのではないかと思う．実際に今年（2014）の秋には，JBAの新潟，愛媛，熊本からアメリカのシアトルにあるケネディ高校に3名の選手が入学をしている．これは，JBAが目標としている世界基準への大きな一歩でないだろうか．今後は，このようなJBA出身の多くの選手がアメリカ等の海外の高校や大学へと進学したり，NBAの下部リーグであるNBADLやNBA，WNBAのような世界のトップリーグで活躍する人材を輩出していけるのではないかと思う．

今後，JBAの活動方針や理念に賛同する団体が他にも現れ，JBAバスケットボールスクールがこれまで以上に多くの場所で展開され，更に大きな組織となっていくことが考えられる．

JBAの拡大と共に運動部活動との融合や関係性を上手く保つことができれば，競技力の向上のみならず運動部活動やバスケットボール界における諸問題の解決に繋がっていくのではないかと期待している．

## Ⅸ. おわりに

第7回JBAオールスター～もうひとつの大会～に参加して，日本における運動部活動やJBAのこと，日本

のバスケットボールの競技力向上について報告を行ったが，今後JBAのような団体などが増加していくことが考えられる．そのような団体と運動部活動が協力していくことで，子ども達のスポーツ環境はますます良くなっていくのではないだろうかと思われる．2020年には，東京オリンピックも控えており今後さらに日本におけるスポーツ活動が発展していく為の環境が整えばと思う．

## X．謝辞

Japan Basketball Academyに関わる皆様のご厚意によって大会へ参加させて頂き誠にありがとうございました．今後ともJBAが益々発展して，ジュニア期のバスケットボール環境を牽引していくことを期待しております．

### 参考文献

ベネッセ教育総合研究所（2014）：速報版「第2回放課後の生活時間調査」子どもたちの時間の使い方「意識と実態」．ベネッセホールディングス：東京．

土井秀和・村上成治・大場渉・奥田知靖（2008）：一貫指導プログラム作成に向けたハンドボール戦術の分析に資する客観的評価指標の構築―年代別の移動特性から表れるゲーム像―．大阪教育大学紀要，第Ⅳ部門57（1），125-135.

Emerald City Basketball Academy. http://www.allcityhoops .com

FIBA.com. http://www.fiba.com

JBA = Japan Basketball Academy. http://www.jbadreams.com/jba/index.html

JBA = Japan Basketball Association. http://www.japanbasketball.jp

小林誠（2012）：学習指導要領からみる部活動に関する一考察―部活動における教師の役割の歴史的変遷―．早稲田大学大学院教育学研究科紀要，別冊19（2），191-201.

久木留毅（2009）：スポーツ政策における一考察―日本のエリートスポーツにおける一貫指導システムの問題と課題―．専修大学社会体育研究所報,57,27-36.

蔵元彩・鈴木淳（2013）：バスケットボールにおける一貫指導システムの現状と課題―サッカーの一貫指導システムとの検討―．福岡教育大学紀要,62（5），111-118.

栗林徹・鎌田安久・小野修二（1999）：岩手県におけるミニバスケットボールの技術指導カリキュラムに関する試案―サッカーの指導カリキュラムを参考にして―．岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター研究紀要，9，73-92.

松村成司・鈴木良和・Peter A. HARMER・James GORDIE（2008）：アメリカにおける子どものバスケットボール競技参加に与える要因について．千葉大学教育学部研究紀要，56．377-385.

文部科学省（1997）：運動部活動の在り方に関する調査研究報告（中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力会議.

文部科学省（2013）：運動部活動の在り方に関する調査研究報告書～一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して～．運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議.

中塚義実（1999）：地域におけるユースサッカーリーグの実践報告―新しいスポーツシステムの理念とその影響について―．スポーツ産業学研究，9（1），49-60.

三本木温・高橋健太（2008）：部活動のあり方を考える．八戸大学紀要，36，151-156.

関喜比古（2009）：問われている部活動の在り方～新学習指導要領における部活動の位置付け～．立法と調査，294，51-59.

関岡康雄編（2004）：コーチと教師のためのスポーツ論．道和書院：東京.

清水将（2011）：高等学校における運動部活動の教育課程上の位置づけに関する検討．東亜大学紀要，14，17-32.

鈴木淳・蔵元彩（2013）：バスケットボールにおける一貫指導体制の再検討―エンデバーシステムの課題―．福岡教育大学紀要，62（5），119-123.

（ホームページは，全て2013年12月1日に閲覧）

Received date 2015年1月7日